

ジョヴァンニ・モレッリ

『イタリア絵画論——ローマのボルゲーゼ美術館とドーリア・パルフィーリ美術館』
翻訳(ア)——ロンバルディア派(ジャン・ピエトリノからチエーザレ・ダ・セストまで)

上田 恒夫

ジャン・ピエトリノ、別称ジャン・ペドリノ(1)

ボルゲーゼ美術館の同じく第十室に《聖母》がある(四五六番)(図版①)
(2)。かなり汚れているもので、きよい絵である。所蔵品目録は同じく名の知れぬレオナルド派の作としている。確かに聖母の甘い微笑はレ



図版① ジャン・ピエトリノ《授乳の聖母》ボルゲーゼ美術館

オナルドとソドマの描く頭部を想起させる。しかしソドマとジャン・ピエトリノは一再ならず取り違えられており(ア)、私たちはこの絵はジャン・ピエトリノ作だと考える。

十五世紀末から十六世紀最初の十年間にかけてのミラノ派について調べるとしたら、多くのレオナルドの弟子たちを識別して、レオナルド直系の数少ない弟子たちと、レオナルドの技法よりは何か美的な影響を受けた弟子たちとを区別するのがよいだろう。前者として、まず、ボルトラッフィオ、マルコ・ドッジョーノ、サライーノ、ジョヴァン・アントニオ・バッツィ「ソドマ」、ジャン・ピエトリノ、チエーザレ・ダ・セスト、そしてたぶんフランチェスコ・ナポレターノ(ブ)も、挙げるべきだとすれば、後者にはアンドレア・ソラーリオ、アンブロジーオ・プレーデイス、ベルナルディーノ・デ・コンティ、ベルナルディーノ・ルイーニ、ガウデンツィオ・フェッラーリ、ミニアチュール画家のアントニオ・ダ・モンツァらが含まれ、彼らの作品は知られてはいるが、今日までのところ画家らの名前に史料の裏づけがない。

(ア) 一八六〇年、トリノのビナコテカの《ルクレツィア》(七三六番)はジャン・ピエトリノの作とされていたが、筆者はこの美しい絵の作者をソドマとした(ナ)。「M」

ロマンツォ『絵画論』G.P. Lomazzo, *Trattato dell'Arte della Pittura*, 1584⁵⁾はジャンピエトリノをミラノのピエトロ・リッツォと呼んだ。生没年とも不明で、署名のある作品も私の知る限りない。彼が直接レオナルドから出発したことは、オックスフォードのクライスト・チャーチ・コレクション中のレオナルドその人の作とされる木炭デッサン(十)(3)がはっきりと示していると思う。残念なことに、聖母の右膝に休らう裸の幼児キリストをあらわすこのデッサンは、「キリストの」額から上が修復で損じられている。通常ジャンピエトリノは半身像を描き、まれに大祭壇画を描いた。彼の署名のある作品の大半は工房作である(十)(a)。彼の第一期の作品は肌の調子は冷たく、手のモデリングに生彩

(b)「前頁」才能に欠けてはいないレオナルドの模倣者たるフランチェスコ・ナポリタノの作品はイタリアではごくわずしか知られておらず、そのほとんどは、私見では、青年時代に属す。なぜならこのフランチェスコは十六世紀初頭以来バレンシアに住み、以後スペインを離れることはなかったと思われるからである。ボノミー・チエレーダ氏はこの画家の青年期の絵を一点所有している。画家の名を添えた小さな《玉座の聖母》であり、幼児キリストとその両脇に聖セバスティアヌスと洗礼者ヨハネを描いている。これとは別の小さな《聖母》は作品交換によりヴェネツィアのアカデミア美術館からチエーザレ・ダ・セストの作としてブレラ美術館に来た。スペイン美術の熟練の目利きであるカール・ユステイ教授からたまわった情報では、バレンシアにはフランチェスコ・ナポリタノの多数の作品があり、最も優れた作品はバレンシア大聖堂にある。この絵はレオナルド風の等身大の人物を描いた十二面からなり、彫刻をほどこした巨大な「レタープロ」(アンゴナ)の翼の内面と外面をかざっている。聖母マリア伝もあらわしたこれらの絵は「フランチェスコ・ナポリ」(ママ)が「バオロ・ダ・アレツォ」の協力

をえて一五〇六年に完成した。ユステイ教授によれば、これらの絵の色彩は非常に強く、後景や建物や肌は温かい褐色調で統一されている。描かれた物語は非常に優美かつ澄明である。しかし二人の描く裸体はつたないと思われる。またこの具眼のユステイ氏の判断によれば、《聖母と聖アンナ》がバレンシアのサン・ニコラ教会にあり、さらにムルシア大聖堂の《聖母の結婚》もフランチェスコ・ナポリタノに帰されると思われる。[M]「以上について諸説がある。同じくカール・ユステイ教授の「バレンシアのレオナルド派の祭壇画の秘密」Carl Justi, *Das Geheimnis der leonardesken Altargemälde in Valencia. Repertorium für Kunstwissenschaft*, XVI, nm. 1, 2, 1893 参照。ボノミー・チエレーダ氏のコレクションの小さな絵はチエーリビの美術館が取得した。F」(十)(a)そのような作品に、ロマンツォ・ピッツィの《聖カタリナ》——三八一番。同館ではアウレリオリ・ルーニーに帰す(十)(e)と、トリノのアカデミアの大きな《この人を見よ》(二四〇番)(十)(f)がある。[M]

があり、この点で、硬く生氣に欠けるマルコ・ドッジョーノの手と対照的であるが、二人はよく混同される(十)(b)。また読者にはこの画家の効果的な黄味がかったオレンジ色に注意するよう願う。なぜなら、この色は彼とその一派にとつてとても重要な色だからだ。非常に美しいこの絵の古いコピーがたくさんある。例えば、ローマのパラッツォ・ロスピリオーシの一点。ミュンヘンのピナコテカカの一〇四七番。同ピナコテカではこれをルーニー二作としていたが新しい所蔵品目録では「ジョヴァンニ・ペドリーニ」(ママ)の真作とされている。

ジャンピエトリノの秀作として、私はボルゲーゼ美術館のこの絵とならんで、同じく聖母子を描いたローマのヴィラ・アルバーニの絵(九番)(十)を挙げるが、そこではサライーノに帰され、故ミナルディ教授もそのように書いている(十)(c)。聖母は右手にニオイスミレを、幼児キリストはユリを持っている。

ジャンピエトリノの注目すべき作品はミラノにある。すなわち、ラウラ・ヴィスコンティ・ヴェノスタ夫人の《聖ロッコ》(七)、ボッロ・メーオ・コレクシヨンの《フロラ》、ブリーヴィオ侯爵方の魅力的な《ニンフ・エゲリア》、ブレラ美術館と市立美術館の二点の《マダラのマリア》、カヴァリエーレたるベニーニョ・クリスピ(十)(g)所蔵の堂々たる《祝福のキリスト》、ボルディ・ベッツォーリ美術館の《聖母子》と《聖母と子羊にまたがる幼児キリスト》(これはルーヴルのサロン・カレ

(b)「この頁」特にトリノのピナコテカカの《十字架を担ぐキリスト》(一〇七番)(十)(g)。ヘンリー・レヤード卿もヴェネツィアの選り抜きのコレクシヨン中にジャンピエトリノの《十字架を担ぐキリスト》を所有している。[M]「この収集家も一八九二年に亡くなり、そのとき、収集品は遺言によりロンドンのナショナル・ギャラリーに移った。F」(十)(c) Minardi, *Scritti della qualità essenziali della pittura*, Roma, 1864. ミナルディはこの絵について「鈍い筆使い、貧弱な感覚と技量の、まったく凡庸な」作品と指摘する。この芸術家教授はウィットツィ美術館の《メドゥーサの頭》をレオナルド・ダ・ヴィンチの傑作と断言するのだから、ジャンピエトリノについての彼の評価に反対するつもりはいささかもない。古の画家に対して多くの現代画家がとるいつものがらの判断に過ぎない。[M]

にある有名な《聖アンナ》のためのレオナルドのデッサンにもとづくが、ポルデイル・ベッツォーリ美術館ではチェーザレ・ダ・セスト作としていた(十)である。

次にこの画家の優品のうちの一点はロンドンの著名な出版人であるジョン・マレーが所有している(十一)。その聖母像においてはジャンピエトリノはソドマに非常に近い。フランシス・クック卿の貴重なコレクションにも、レオナルドの名をもつジャンピエトリノの作品が一点ある(十)。サンクト・ペテルブルグのエルミタージュ美術館の通称《コロンビーナ》は、かつてレオナルドその人の作とされたが、今はルイーニに帰されている。クローとカヴァルアセツレ(第二巻、五八頁)はこの絵をアンドレア・ソラーリオ作品中、いや全レオナルド派中、最も優れた絵の一点というが、これも疑問の余地なく真正正銘のジャンピエトリノの作である(十)。この絵において―実は私は写真でしか知らないが(a)―特に左手の形に画家の個性があらわれており、ルイーニやソラーリオの手の形からほど遠いものである。

ジャンピエトリノの大祭壇画のうち、私は、バヴィーアのサン・マリノ教会の一五二一年の祭壇画―教会ではソラーリオ作としている(b)(12)―と、ミラノのサン・セポルクロ教会の聖具室にある奏楽の天使らのつどう《キリストの降誕》を挙げる。レオナルドの没後ひんばんにイタリアに旅していたネーデルラントの画家たちはジャンピエトリノの工房に足繁く出入りしていたに相違なく、その証拠にフランドルⅡジャンピエトリノ風の絵が数多くあり、例えばドーリア美術館第二翼の肖像画《ジョヴァンナ・ダラゴーナ》と、ジェノヴァのバルビ・コレクシヨンの同じくジョヴァンナの肖像画、そしてミュンヘンのピナコ

(a) ベルナルデイーノ・ルイーニの名でブラウンの図録七四番にある。[M]

(b) ルーヴル美術館はジャンピエトリノの赤チョークのデッサンを一枚所有している(ブラウンの図録一八七番。ルーヴルではレオナルド・ダ・ヴィンチ筆と誤認(十)。おそらくこの祭壇画のためのスケッチだったのだろう。[M]

テーカにあるフランドル派の《聖チェチリア》などがそれである。

ポルトラッフィオ(13)

ローマのサント・オノーフリオ教会のキオストロの損傷の激しい壁画を別にすれば、私の知る限り、中部イタリアと南部イタリアのどこにもポルトラッフィオの作品はない。サント・オノーフリオ教会の聖母(14)はG・フリッツォーニ博士がはじめてレオナルドではなくポルトラッフィオ筆であると明言し、私もこれに賛同するが、この画家の強い特徴である聖母の縦長楕円形の頭部によってこそ作家の判別可能である。しかし壁画の現状では、壁画は消失同然と見なすほかない。謹厳なポルトラッフィオの作品をもっと間近に見たかったら、タブロー画―大半は小さなサイズである―を画家の古里ミラノで探すことである。すなわち、ポルデイル・ベッツォーリ美術館(15)、デル・マイノ家、ソーラ伯爵方(16)、フリッツォーニ氏(17)とモレッリ氏のコレクション(18)、アンブロジアーナ(デッサン)、イーゾラ・ベッラの諸作品。ベルガモの市立美術館にこの画家の傑作《聖母》(19)がある。同じくベルガモにはアントニオ・フェデリコ・フリッツォーニ方に横向きに描かれた小さな《聖セバスティアヌス》(20)もある。ミラノのサン・マウリツィオ教会の内側廊下にある殉教聖女らの半身像も、ポルトラッフィオの下図によって弟子たちが壁に描いたと考えられるが、この円形画(19)は非常に美しい(21)。

しかし、思うに、この画家の最高の傑作はロンドンのナショナル・ギャラリーの大きな《聖母》(c)(22)である。ブダペストのエステルハージ・ギャラリーの聖母図(一七五番)(23)はこれに非常に近い。ただし、私の記憶が正しければ、ポーデ館長はベルナルデイーノ・デ・コンティに帰した。

マルコ・ドッジョーノ(24)

私は、サライーノ作と認定できる作品を一点も知らなかったし、公立の美術館でサライーノに帰されている絵はかなり疑わしい。しかしボルゲーゼ美術館はマルコ・ドッジョーノ(一四七〇?—一五四〇年?)の《サルヴァトール・ムンディ》を所有している(四三五番)(図版②)。入念に仕上げられたこの絵は窓の近くに展示しており、美術館はこの作品の価値を認めているのだと観客に知らしめている。この絵はほぼ三世紀の間レオナルドの作とされていたのだから、高評しないわけにいかない。教皇パオロ五世はこの絵をレオナルドの作と考えて自分のベッドの上に飾らせた。ところが、彼の甥でこの美術館の創設者たる枢機卿シピオーネ・ボルゲーゼがフィレンツェの巨匠「レオナルド」の作品を当時発足したばかりの美術館に収蔵すべく長年探し求めていたものの、徒勞に終わったので、ついに教皇はしぶしぶこの絵を枢機卿に譲ったのであった。この絵は救世主を半身像であらわし、右手で祝福を送り、左手に地球を持っている。この絵と比較すべき絵がミラノのジョヴァンニ・モレッリのコレクションにあり、画題は同じく《サルヴァトール・ムンディ》、

(c)「前頁」アンブロジーアーナ所蔵のすぐれたバステルのデッサン二点(アンブロジーアーナではレオナルドに帰す)のほかに、私はルーヴル美術館のデッサン一点を知っているが(ルーヴルでは同じくレオナルドに帰す)、これはポルトラッフィオ筆であると思う⁽²⁵⁾。この銀筆によるデッサン(ブラウンの図録一七六番)はカシの葉の花綱を戴く「横きの」青年を描き、ポルトラッフィオが上述の《聖セバスティアヌス》(ベルガモのアントニオ・フェデリコ・フリッツォーニ氏所有)のためにもちいられた。この際ポルデ館長に言わせていただきたいが、アンブロジーアーナの男の肖像はポルデ氏にはポルトラッフィオの「できのよい」作品に見えたが(ポルデ、第二巻七四六頁)、私にはミラノ派などではまったくなくてバルマ派の作品に見える。この肖像はアンブロジーアーナではポルトラッフィオに帰しているのは事実だが、これは前世紀のかなり恣意的な作家判定の一例であり、こうしたことはイタリアの美術館の館長らの無知と怠慢から長く続いたのである。「M」[ボルゲーゼ美術館の第四室一五一番は婦人の肖像(胸像、板絵)であり、同館ではロンバルディア派とするが、修復で後世の筆が取り除かれた結果、ポルトラッフィオの作であると判断できる(26。F)]

サイズはほぼ同じであるが、ポルトラッフィオの筆になる⁽²⁷⁾。見たところ、この二点の絵は、レオナルドの弟子にして助手である二人の画家によって同時に制作されたのである。マルコ・ドッジョーノの描く着衣は、マルコやポルトラッフィオが、また時にはジャンピエトリノも好んだピンクがかった赤色であり、マントは濃いコバルトブルーである。手指は硬く生氣に乏しく、かなり間をとった両頬骨はマルコ・ドッジョーノの特徴である。鋭い袖の襷も黒い影と強い光も、マルコの全作品に等しく認められる。背景はミラノ派のほとんどの半身像と肖像に見られるように、暗い。ともかく、マルコ・ドッジョーノの作品の大半はミラノとミラノ近辺にある。すなわち、サンタ・エウフェーミア教会、アンブロジーアーナ、ボノーミ・チエレダ・コレクション、ブレラ美術館他にある⁽²⁸⁾。



図版② マルコ・ドッジョーノ《サルヴァトール・ムンディ》
ボルゲーゼ美術館

ニコラ・アッピアーニ(a) (29)

ニコラ・アッピアーニはマルコ・ドッジョーノの同時代の人であるが、その名はほとんど知られず、確かに凡庸な画家ではあった。プレーラ美術館で彼の絵を二点を見ることが出来る。すなわち《マギの礼拝》と《キリストの洗礼》(それぞれ八四番、八五番)である(30)。私の間違いでなければ、サンタ・マリア・デレ・グラーツイエ教会の聖具室の祭壇画もアッピアーニに帰され、教会が言うようにマルコ・ドッジョーノの作ではない(+) (31)。

同じくトリノのピナコテカの《聖カタリナの結婚》(二〇四番)も、マルコ・ドッジョーノではなくニコラ・アッピアーニの筆とすべきだろう(+) (32)。この画家のその他の小さな二級品がミラノの個人コレクションにある(33)。

チエーザレ・ダ・セスト(34)

私はローマでチエーザレ・ダ・セストの作品に巡りあわせたことがない。彼が長くローマに滞在していたことを考えると、これは不思議なことである。ただし、ヴァチカンのコレクションに、この画家の名前と一五二一年の年記を添えた大きな聖母図があり、美術史よりは教会史に明るいリオ氏はこれを価値ある一品としたが(Leonard de Vinci et son école, p. 216)、北イタリア派に精通していない美術愛好家でさえ、誰

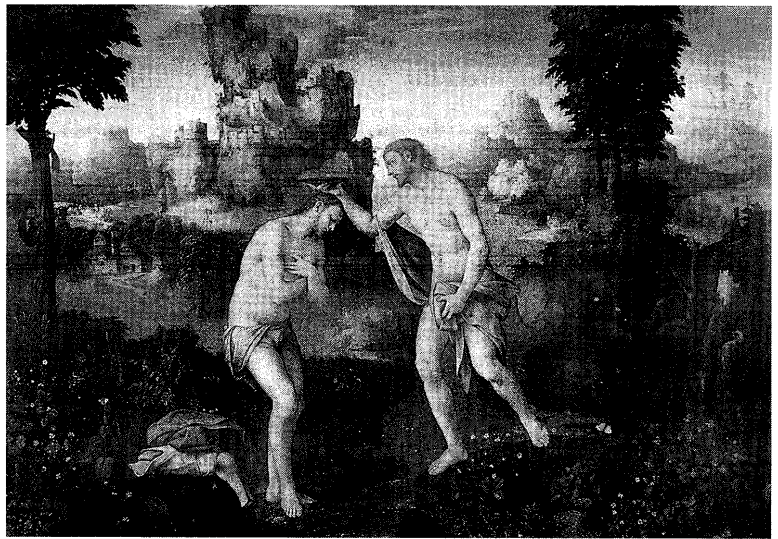
が見ても、時期の下るロンバルディア・ミラノ派の弱い工房作としか思えないだろう。Cesare da Sestoと記したイタリア語の書体は明らかに近代のものであり、オリジナルではない(+) (b)。

この絵は座る聖母とその膝にのる幼児キリストをあらわし、キリストは聖母の帯を手にとっている。右側に司教聖人を、左側に洗礼者ヨハネを配する(35)。

チエーザレ・ダ・セストは、おそらく一四八〇年ごろマッジョーレ湖付近のセスト・カレンデに生まれた。いつどこで死んだかはわからない。ヴァザーリは『美術家伝』第九卷二十五頁でチエーザレについて「すぐれた風景画家だが人物は得意としなかったベルナツツァーノは、人物描写に秀でたチエーザレ・ダ・セストと交友を結んだ」、また第十一卷二七四頁では「マルコ・ウッジョーニ(ドッジョーノ)のほかに多くの画家が、レナルド・ダ・ヴィンチをうまく真似でき、なかでもチエーザレ・ダ・セストは」と書き、チエーザレの例として《キリストの洗礼》(c) (36) (図版③)と《ヘロデア》と大画面の《聖ロッコ》を挙げている(37)。私の知るチエーザレ・ダ・セストの最も早い時期の絵はミラノの伯爵ボッロメオ家であり、《マギの礼拝》(38)をあらわす。非常に興味深いこの絵は十六世紀初頭に描かれたと思われ、この若いロンバルディアの画家がフィレンツェで一部はロレンツォ・ディ・クレーディの、また一部はマリオット・アルベルティネッリの影響を受けたことを明らかに物語り、シエナではピントウリッキオの影響を受けたに違いない(+) (d)。故ロドヴィーコ・メルツイ・デリル家にある円形画《聖母と幼児キリ

(a) プレーラ美術館の二点の絵は、司教座聖堂参事会員カルロ・トッレが『ミラノの肖像』Carlo Torte, *Ritratto di Milano* のなかでニコラ・アッピアーニの作としてすでに引用しているが、はたしてそれが正しいかどうか何とも言えない。なぜならこの画家の署名のある作品は一点も知られないからである。ヴァザーリもロマツツォもアッピアーニについて言及していない。もっともカルロ・アモレッティは『レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯・研究・作品の歴史的記録』Carlo Amoretti, *Memorie storiche su la vita, gli studi, e le opere di Lionardo da Vinci* の一五六頁でアッピアーニについて述べている。

(b) ボーデ館長(第二巻七五一頁)もこの円形画をチエーザレ・ダ・セストと考えている(そして第六版七四三頁でそれを追認する!)。[M]
(c) モリツァによれば、この《キリストの洗礼》は一五九五年上院議員ガレアツツォ・ヴィスコンティ方にあり、今はミラノのスコッティ公のパラツツォにある。[M]
(d) この絵はチエーザレ・ダ・セスト作とすべきだと考えるが、読者には、この画家特有の人物の身振りと動きのほか、手と耳の形を仔細に検討していただき、私の判定の正しさを納得していただければさいわいである(+)。[M]



図版③ チェーザレ・ダ・セスト《キリストの洗礼》ミラノ、ガッララーティ=スコッティ・コレクション [現在カステル・スフォルツェスコ内]

ストと洗礼者ヨハネ⁽³⁹⁾は彼の青年期の作品であると思われる、この絵のコピーがベルナルディーノ・ルイーニの作としてウフィッツィ美術館に展示されている(一〇一三番)(十)。この円形画の今ひとつのコピーが、以前ボルゲーゼ美術館にもあった(十)。

この「ミラノのチェーザレ」は一五〇六年頃、おそらく美術愛好家のオステティアの城主バルド・マジニの依頼により(ヴァザーリ第十卷、二二二頁)、バルダッサツレ・ペルッツィと協力してオステティアの「城」の壁画を描いたが「ヴァザーリ第八卷二二二頁」、これはチェーザレ・ダ・セストその人のことであろう。一五〇七年から一五二二年頃にかけて多分チェーザレはミラノで、レオナルド・ダ・ヴィンチの直接の影響のもとに制作していただろう。私見では、それを証する作品として、まずは、ルーヴル美術館の通称《天秤の聖母》(四六五番)(パッサヴァン第二卷三四五頁ではサライーノに帰される)⁽⁴⁰⁾、《ヘロデア》(今日ウィーンのベルヴェデーレ美術館)⁽⁴¹⁾、リッチモンドのフランシス・クック卿方の《聖ヒエロニムス》^(a)、エステルハージ・ギャラリー(ブ

ダベスト)の美しい《聖母》(一七二番)⁽⁴²⁾、メッシーナの教会のために彼が描いた今日ナポリの美術館にある大きな《マギの礼拝》⁽⁴³⁾がある。これら作品はどれも、チェーザレ・ダ・セストがレオナルドの模倣者であったことを示している。反対に、チェーザレがミラノのサン・ロッコ教会のために描いた大画面の《聖ロッコ》は、ラファエロ・ロマッツォによればチェーザレとラファエロは深い仲であったが後のチェーザレの模範になったことを証している^(b)。ルーヴルにあるチェーザレのデッサンのうちの一枚から、一五二〇年頃ともかく彼がローマにいたとほぼ断定できる。この重要なフォリオはヴァラルディ Vallardi のいわゆる「レオナルドの本 *Libro di Leonardo*」のなかにある(六七八二番)。このフォリオに、ロマッツォがすでに記した《龍との闘い》があらわされている。このフォリオの裏面には三人の人物が描かれ、そのなかに、ラファエロの《キリストの変容》(一五一九〜二〇年頃)から写し取られた悪魔憑きの者たちの母もいる(十)。

チェーザレのこれに続く時期の作品として、幼児キリストを抱き二聖人を脇に配した三点の聖母図を挙げることができる。そのうちの一点はサンクト・ペテルブルグのエルミタージュ美術館にありレオナルド作としている^(c)。第二はロンドンのモンソン卿方にあり、第三はブレーラ美術館にあり適切にチェーザレ・ダ・セスト作としている。このブレーラ美術館の《聖母》には聖母子と両脇のヨセフとヨアヒムのほかに、童形の洗礼者ヨハネも描かれている。

(a) モリッジアが「ミラノの貴顕」 *Morggia, La nobiltà di Milano* を刊行した一五九五年にはこの絵はグイド・マッツェンタ氏方にあった。[M]

(b) 聖ロッコを描いたこの大祭壇画は、今、ミラノの故ロドヴィーコ・メルツイ公方にある⁽⁴⁴⁾。[M]

(c) モリッジアの「ミラノの貴顕」(一五九五年、第五書) *Morggia, La nobiltà di Milano, 1595, libro quinto* ではチェーザレ・ダ・セスト作、元老議員ガレアツォ・ヴィスコンティ所有とし「幼児キリストを抱いた聖母とヨセフと一殉教聖女」と記している。したがってこの絵がレオナルド作とされたのはそれより後である。[M]

このほかにもブレイラ美術館は非常に優雅な小さな聖母図(二三三番)を所有しており、これはチエーザレの第一期の作品である(a)。

(a) 初学者のために、一部はレオナルド作とされているチエーザレのデッサンをいくつか挙げたい。特に今も「レオナルドに帰されている」木に縛りつけられ、左に兵士らを配した赤チョークのデッサン《聖セバスティアヌス》(ウインザーのコレクション)(十)、『ガゼット・デ・ボザール』(「レオナルド・ダ・ヴィンチの最後の制作」*Les derniers travaux de Leonard de Vinci*) 所収のデッサン(グロヴノ・ソサエティ八六番)(十)。このデッサンはチエーザレ・ダ・セストが壁画(前出のモリッツァが伝えるミラノ近郊のレスタ伯爵の別荘の壁画。これは一九五五年にまだ見ることができた)に使用した(45)。今なくなったこの壁画の古いコピーがパヴィーアのマラスピーナ・ギャラリーにある。このチエーザレ・ダ・セストのデッサンにミケランジェロの影響を見逃すことはできない。チエーザレのこの赤チョークのデッサンのほか、ウインザーのコレクション中の二枚についても記さねばならない(ウインザーではやはりレオナルド作としている)。この二枚は同じフオリオに描かれた二体のブットの習作である(グロヴノ・ソサエティ、六六番)(十)。大英博物館にもレオナルドの名でチエーザレ・ダ・セストのすぐれたデッサンがある。第十六巻中の「フオリオの一八六二番、十番、十一番、一九六番であり、フオリオには通称《アルバ家の聖母》のペン描きデッサン二図と、裏面は赤チョークの老人の頭部が描かれる。同じくレオナルド作として、通称ヴァラルディの「レオナルドの本」の中にルーヴルの聖母図の習作が一図、またその下に座る寓意像一図を描いたフオリオがある(六番、七八一番。プラウンの図録一八九一番)(十)。トリノ王立図書館は幼児キリストの美しい習作二枚を所有し、正しくチエーザレ・ダ・セスト作としている。ヴェネツィアのアッカデミアにもチエーザレのすぐれた赤チョークのデッサン(図版④)とナポリの美術館の大きな絵《マギの礼拝》のためのペン描きデッサンが多数所蔵される(ペリーニ、一九六番)。(M)



図版④ チエーザレ・ダ・セスト《マギの礼拝》のためのデッサン アッカデミア美術館(ヴェネツィア)

以上に述べてきたことから、チエーザレはほかのレオナルドのすべての弟子と同様にすぐれた技量の持ち主であったことがわかるが、しかしソドマほどには個性的でも自主的でもなかった(b)。

次にボルゲーゼ美術館にはレオナルド派の作品として以下の絵もある。

《虚栄》の寓意画。ルイーニによるコピーである(46)。

《この人を見よ》(二八六番)(c)はアンドレーア・ソラーリオに似た構想とテクニクを示す。

半身像の《聖アガタ》はルイーニによる後の弱いコピーである。

(b) ドミニチが主張するように、才気ある「即興家」だったアンドレーア・サツパティニ・ダ・サレルノの師匠はラファエロよりはチエーザレ・ダ・セストであろう(十)。アンドレーア・ダ・サレルノの作品はナポリの美術館といくつかの教会でさがすことだ。[M]

(c) 《悲しみの聖母》(「ボルゲーゼ美術館の」第六室、二八〇番)と対をなす絵である。この聖母図の裏に古い書体による以下のインスクリプションがある。

SYMON DE CHA/LONS. EN. CHAPEINE/MA PEIN/1543.

両方の絵ともにアンドレーア・ソラーリオの原作にもとづく。《悲しみの聖母》の原作はミラノのカヴァリエーレたるベニーニョ・クリスピ方にあり、さいわいなことに氏はこのほかソラーリオの貴重な作品を三点所有している。[F]

訳注

*以下の注において作品の来歴・所蔵等のデータについてはAnderson, 1991に負っている。

- (1) ジャンピエトリノ(ジョヴァン・ピエトロ・リッツォーリ Giovanni Pietro Rizzoli 一四九五頃-一五四〇頃活動)はレオナルド・ダ・ヴィンチのアトランティコ手稿に見える *giampietro* (Cod. Atlantic, fol. 713r) と同一人物とされ一四〇〇年代末にレオナルドのミラノの工房で仕事をしたと考えられ、さらにレオナルドの第二期ミラノ時代(一五〇八-一五一三年)にもレオナルドの影響下に制作したと思われる。

- (2) ボルゲーゼ美術館で古くはレオナルド・ダ・ヴィンチに帰していたが、十九世紀にレオナルド派の作と改められ、一八六九年フリッツォーニ(モレッリの盟友の美術史家。この日本語版の底本たるイタリア語版訳者)がジャンピエトリノに帰した。レオナルドの失われた同主題の絵(ないしデッサン)のコピーであるとする説があるが、ジャンピエトリノの基準作は少なく、結論は定まらない。少なくともこの作品がレオナルドの影響下のジャンピエトリノ作であることは今日の定説である。 Della Pergola, I, p.77 参照。

- (3) モレッリの判定はその後承認されている。

- (4) チューリヒのクンストハウスの署名入りの祭壇画とユステイの発見したスペインの作品以外にフランチェスコ・ナボレターノの確実な作品は少ない。

- (5) この《聖カタリナ》は今日ウフィツィ美術館(八五四四番)にあり、ジャンピエトリノ作としている。

- (6) モレッリの判定は承認されている。

- (7) ジャンピエトリノの《聖ロッコ》は今日ローマのマルゲリータ・ヴィスコンティ＝ヴェノスタ・バッラヴィーチーノ・モッシ伯爵夫人の所蔵である。なお、ここに列記された作品の所蔵者の多くはモレッリの依頼人ないし友人である。

- (8) アンダーソンによれば、クリストフ・フォロ・ベニーニョ・クリスピはモレッリの助言により絵画を収集し、アドルフ・ヴェントゥーリもクリスピのコレクションについて論文を書いている (Anderson, 1991, p. 443, n.34)。

- (9) 《十字架を担ぐキリスト》はモレッリ以前はマルコ・ドッジョーノに帰されたが、今日ではジャンピエトリノ作とするモレッリの判断に異論はない。

- (10) レヤード旧蔵の《十字架を担ぐキリスト》はロンドンのナショナル・ギャラリー、三〇九七番。モレッリの勧めでレヤードが購入した作品。後一八六五年、修復のためにモレッリにゆだねられた。

- (11) マレー所蔵の聖母像は所在不明。

- (12) 聖母子と諸聖人。モレッリの判定は受け入れられている。

- (13) ボルトラッフィオ (Giovanni Antonio Boltraffio ミラノ一四六七-ミラノ一五一六) はミラノ時代のレオナルド・ダ・ヴィンチの影響下で制作した画家のひとり。

- (14) サント・オノフリオ教会のキオストロの入り口のリネネットに描かれた《聖母子と寄進者》(一五一三年)。アンダーソン (Anderson, 1991, p. 444, n. 41) によれば、一八五六年イーストレックもこの壁画をボルトラッフィオ作とするが、チェーザレ・ダ・セストの若描きとする人もいる。

- (15) ボルディ＝ベツォーリ美術館の《聖母子》。モレッリはこの美術館の作品選定に協力してきたから、この作品は彼にとって既知の作品であった。

- (16) ソーラ伯爵方のキリスト像。ボルトラッフィオに近いがオリジナルと認められない。

- (17) フリッツォーニ所蔵のボルトラッフィオの男の肖像画が二点あり、一点は今日ロンドンのナショナル・ギャラリー所蔵(二九一六番)(フェデリコ・フリッツォーニ・デ・サーリス旧蔵)。他はグスタヴ・ヴォ・フリッツォーニ旧蔵。

- (18) 今日アカデミア・カッラーラ所蔵の《祝福する救世主》、一〇一七番(六九四番)。

ボルトラッフィオ派の問題のオリジナルのコピーとされる。

- (19) アッカデミア・カッラーラ (ローキス・コレクション) の《授乳の聖母》、七二七番 (一九七番)。

- (20) ボルトラッフィオのオリジナルとは認めがたい。

- (21) サン・マウリツィオ教会 (モナステロー・マッジョーレ) のコロロ・デレ・モーナケにある。殉教聖女らの半身像はルイーニ作とする説もある。

- (22) ロンドンのナショナル・ギャラリーの作品は《聖母子》(七二八番)。

- (23) ブタベストの祭壇画はローディ将来。真筆と認められる。

- (24) ドッジョーノ (Marco d'Oggiono 一四六七頃―一五二四) はミラノにおけるレオナルド派の画家のひとり。史料から一四八七年には画家として独立していたと考えられる。ミラノのほか、ヴェネツィア、レッコ、サヴォーナで祭壇画と小サイズの絵を多く描いた。レオナルド派の画家としてボルトラッフィオと協力したことも知られるが、ボルトラッフィオよりすぐれ、存命中名声があり財をなした。

- (25) ルーヴルのデッサンは今日、ボルトラッフィオ作とは認定しがたい。

- (26) この注はフリッツォーニのものであり、修復結果にもとづいてボルトラッフィオとされた。フリッツォーニの判断は受け入れられている。

- (27) 今日アッカデミア・カッラーラ所蔵の九七七 (五二七) 番。レオナルドの助手の筆ではあろうが、誰であるかは決めかねる。

- (28) サンタ・エウフェーミア教会の《聖カタリナの結婚》、アンブロジーアーナの聖母子と福音書記者聖ヨハネ、洗礼者ヨハネを描いた祭壇画、マレーオのミノーリ・オッセルヴァンティ教会のポリプティク (一五一六年)、ブレーラ美術館の《聖母昇天》など。最初のサンタ・エウフェーミア教会の絵を除きドッジョーノの真筆とされる。

- (29) ニコラ・アッピアーニ (Nicola Appiani) について十六世紀初頭ミラノで活動した

こと、ミラノ時代のレオナルド・ダ・ヴィンチの弟子であったことが知られる。ミラノのブレーラ美術館とサンタ・マリア・デレ・グラツィエ教会の作品、トリノのピナコテカ作品 (本節参照) のほか、カステル・スフォルツェスコにデッサンが所蔵される。

- (30) ブレーラ美術館のカタログではこの二作をマルコ・ドッジョーノの協力によるジョヴァンニ・アゴスティーノ・ダ・ローディの作と判定している。

- (31) 洗礼者ヨハネと寄進者を描くが、今もドッジョーノ作とされている。

- (32) 今日マルコ・ドッジョーノの作と判定されている。

- (33) このほか、アッピアーニのデッサンがミラノのカステル・スフォルツェスコにある。

- (34) チューザレ・ダ・セスト (Cesare da Sesto セスト・カレンデ一四七七―ミラノ一五二三) はミラノにおけるレオナルド派の代表的画家。ローマのほかナポリ、シチリアなどイタリア南部に旅して、レオナルドとその時代の絵画動向を南イタリアに広めた。一五〇六年にはすでにローマに来ており、一五〇八年にはバルダッサレ・ベルツィととともにバチカンの教皇ユリウス二世のスタンツァの壁画、同じ教皇の寝室の絵ほかを担当。ローマ近郊のオスティアの城の壁画 (本節参照) はヴァザリーの記述にもあり、一五二一年の作。ニューヨークのピアポント・モガン・ライブラリーにチューザレのローマ滞在期のものと推定される二四葉からなるデッサン集があり、これらに若いチューザレにラファエロとミケランジェロの影響力を感じさせる。

- (35) ピナコテカ・ヴァティカーナ所蔵の《聖帯の聖母》。同館ではロンバルディア派としている。

- (36) チューザレ・ベルナツツァーノの協力による。

- (37) サン・ロッコ同心会のために制作した聖母子と聖人たちを描いた祭壇画。中央パネルに聖ロッコを描く。一五二三年に制作依頼を受け、助手が参加して完成。

- (38) チューザレ作としない説もある。

(39) 所在不明。

(40) ルーヴル美術館でもチェーザレ・ダ・セスト作としている。

(41) 今日ウィーン・美術史美術館所蔵の《サロメ》をさすか。ロマッツォが所有していた作品であり、チェーザレ作としたモレッリの判定はこれによって保証される。

(42) 今日ポルトラッフィオに帰される。

(43) 一五二四年にチェーザレ・ダ・セストはメッシーナにいたことが知られる。

(44) 現在、ミラノのカステル・スフォルツェスコに移管。一五二三年チェーザレが受注したことがわかっている。

(45) このデッサンはモレッリの新発見である。このデッサンによって描かれた壁画はロザーテのヴィラ・ナヴィリオにあった。

(46) 《フローラ》か。筆力は弱く、メルツイの絵のヴァリアントとされる。

PHOTO CREDITS: All four illustrations are taken from *Giovanni Morelli De la Peinture italienne. Edition établie par J. Anderson, Paris, 1991.*

(うえだ・つねお 西洋美術史)

(二〇〇七年一月三十一日受理)